



# 都上りの詩篇 詩篇121篇

## 詩121

2012.12.10

申命記26:29 主はわたしの助けおほし。

- 全送 7-2 助けは主から - 124:8, 目と上げろ 123:1, 131:1, 天地を造られた 134:3
- 脱出 3-4 守る方は眠らぬ。 - 127:2, 132:3-4, 130:夜明け待つ, 131:赤人が眠る
- 荒野 5-6 守る方は昼も夜も守る
- 約束地 7-8 守る方はわたしが守る。 - 126:6 行く。来るにも  
とこにないなら

- 120・123 救を上げろ vs 助けろ。
- 121・124 わざわい敵 vs 守る。味方。助け
- 出エジプト 12:42 エジプトから連れ出す。寝る番をさした。
- 13:21,22 昼も夜も雲の柱。火の柱。
- 14: 大水が超えていく
- 15:13,17 聖なる御住まい、ご自分の山、聖所。
- 申命記 8: 荒野での試みは、主を恐れ、山に導かれた。西の山に守る方であった。
- Rev. 7:13-17 聖所に仕える者、日が打つと光。
- 132 (主の家への道に半C)  
主は守る - 主は必ず誓いを果す = 恵み  
→ Ps119 命令を守りまわす。  
主の道を守る
- モリヤ山 (II歴3:1)  
創12:4,13 目と上げろ。  
14 主の山上には備えがある。  
(5 行を、礼拝し、来る。)  
(初子イサクを打つ)
- 創128: 神の家への道に半C。眠り  
行くにも守る。15,20  
民6: 主が祝福し守る方おほし。  
ヨハ24:17 守る方おほし。

詩篇121篇、都上りの詩篇の2つ目です。

「山に向かって目を上げる」というところから始まります。「守る方、守る方、守られる、守られる」という「守られる」ということがテーマだということは、はっきりしている詩篇です。

「助けは天地を造られた主から来る」ということですが「助けは天地を造られた主から来る」は、都上りの中では124篇にあります。「目を上げる」というのは123篇、131篇の出だしです。「天地を造られた主」という言い方で都上りは終わっています。

「眠る、眠らない、守る方は眠らない」というのがありますが、眠っている間に備えてくださるとか、私は神様の家を見出すまでは眠りませんとか、夜回りが待っている、赤ちゃんが安らかで眠っているという、「眠る」というテーマも、この121篇、安息ということですかね。眠っている間に、助け手が与えられる。眠っていますけれど、都上りの中で眠るということは、よく出てきます。

「昼も夜も守ります」ということは、エジプトから出たところを思い出しますね。エジプトから連れ出されたとき、神様は寝ないで、寝ずの番をされました。昼も夜も、雲の柱、火の柱で導きました。大水が超えていくとそれでも聖なる御住まい、ご自分の山、聖所に導いたというのが、出エジプト12章から15章のところに書かれています。荒野の導き、荒野で導くことを、「昼も夜も守る」というところは、思い出します。荒野での試みは、主を恐れ民を幸せにするためだったということは、申命記の8章に何度も書かれています。だから、主の命令を守りなさいということですね。「昼は日が打つことは無し」というところは、黙示録の最後の7章のところで、聖所で仕える者は日照り

で打たれることはない。昼の太陽と月が、エジプトとバビロンだと。バビロンとか他のペルシャとかの国々だということ言う人もいますし、荒野なので、昼の太陽の日照りと、夜の寒いことということから、守られるということも言われたりしますが、どちらもあり得るものだと思います。荒野で守られるということです。

「山に向かって目を上げる」というところでは、最初にストーリーとして思い出さなくてはいけないだろうというのは、モリヤ山の話です。目を上げて見ましたと。その主の山の上には備えがある。そこに行って礼拝して戻ってきます。初子を打つ、エジプトの時に初子が打たれるのと同じような事を連想します。イサクを捧げなさいと言われた創世記22章のところですね。22章のところその話をしますよね。その後28章で神の家の話がある。ベテルの話になっている。モリヤ山の話思い出さなくてはいけないのは、この山に向かって目を上げているエルサレムがモリヤ山の話ですから、モリヤ山に向かっていくことが言えますので、その最初の主の山、主の家の話、備えがあることは連想しなければならないことだろうと、言葉のリンクでも思われますね。

それと、28章に、ヤコブが夢を見ます、眠ります。眠っている時に、神の家の夢を見て、「どこに行っても、あなたと共にいてあなたを守ります」というのが、15節と20節で「共にいて守ります」ということが強調されているのも、神の家の話ですね。民数記の6章、大祭司の祝祷のところ、祝福の言葉も、出だしは「主があなたがたを祝福し守られますように」というところから始まります。ヨシュア24章のところ、全ての道を守ってくださったということが記録されていますけれど、他の都上りの詩篇との連携と、123篇、124篇、132篇というところは、全体の繋がりにもう一度見ますけれど、121篇の中の構造として4つに分けることは普通にどの人も4つに分けるようですね。

1,2、3,4、5,6、7,8とこの4つは、じゃあどういう関係なんだろうかということを考えました。「天地を造られた主から主が守る、助ける」ということは、創造のところ。3から4のところは、「寝ずの番をして脱出する新しい創造をしてくれる」というような形ですよ。主が造ってくださる、救ってくださる」というところが3,4で、5から6は「荒野で導かれる、昼も夜も守ります」。7,8は「とこしえのいのち、約束の地に入る時に全て守られる」というのが全体の流れなのかなと。

創造、脱出、荒野、約束の地。書物的に言うと、創世記、出エジプト記、民数記、ヨシュア記かなと。申命記の終わりからヨシュア記かなというような、歴史的な背景を連想しつつ、最初から最後まで、主は守ってくれるという詩篇。主は我らの助けまた盾であるというのは、申命記33章のモーセの最後の歌の結論の部分ですね。

「幸いな者よ、イスラエル」という時に、「主は我らの助け」という言い方がありません。その121篇は、「主が守ってくださる」ということですが、120篇から134篇までの中の121篇の位置づけということと言うと、「主が助け主で守られる」というところが、このキーワード、同義。バビロンから戻ってくる。捕らわれていたところから戻ってくる時の守られた主が、共にいるということがその中心的なテーマになっていると思われます。